慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	村松暎先生に訊く：平成二年七月十六日 (月) 於三田地域研究センター
Sub Title	An interview with professor Ei Muramatsu (Mita campus, 16 July 1999)
Author	岡, 晴夫(Oka, Haruo)
Publisher	慶應義塾中国文学会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾中国文学会報 (Bulletin of The Keio Sinological Society). No.3 (2019.) ,p.48- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	奥野信太郎先生没後五十年記念特集号 特別寄稿
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20190329-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

村松暎先生に訊く

平成二年七月十六日（月）　於　三田地域研究センター

インタビュアー　岡　晴夫

――今日は先生から、特に何をということもございませんで、ともかくまあ、先生がやってこられたこと、考えておられることなど、何でも気の向くままに伺わせて頂きたいと思っております。まずは、そうですね、先生が慶應に入られたそもそもの辺りからおうかがいすることにしましょうか。

先生は始めは早稲田に行っておられたそうですね。

旧制中学を。小学校は清水ですから、六年の時に家族が東京へ出まして、従って中学は東京の中学に入らなくてはいけないということで、選んだのは兄達が選んだのです。自分たちが早稲田に行ってたもんだから。早稲田を受けたら受かった訳です。早稲田に入ったというだけだけれども、早稲田へ五年も行ってたんだから、早稲田大学へ行く気でいたんですけれども、早稲田中学というのは付属ではなかったから、入学試験がある訳で、受かるとは限らないとすれば、他も受けなきゃというので、早稲田の他に慶應と立教に願書を出したんですよ。慶應を受けたら当時文学部の試験に数学があったんですね。

――ほう、数学がありましたか。私なら全くお手上げですね。

ところがそれがケッサクで、最初国語だか英語だかがあって、昼休みをはさんで次が数学だった。すると早稲田中学のクラスは違ったんだけど、今でも名前を覚えてますけど、大蔵金太郎という、ばかに金持ちみたいな名前の奴にばったり出会って、二人で庭で弁当を食いました。その時に彼は次が数学の試験なものだから、代数の定理集を持って来ていました。それで、彼が代数の定理集を見ている時に、幾何のを貸してもらったんです。どうせ飯を食いなが

らだったから、ぱらっと見ただけですが、そのぱらっと見た定理の応用問題が出たんです。いかに数学が駄目だって言ったって、見たばかりの定理の応用なら出来る。という訳で、四問中三問出来た。で一次に受かった。だいたい数学が不得手な奴が受ける学科だから、数学が四問中三問できたなら入っちゃう。英語は出来なかったけど。二次の時、大蔵は来てなかった。その二次の日が早稲田の一次だったんですが、もう試験なんかいやだと思ったから、それをふって慶應を受けたんです。

――二次というのは面接だけで？

そう。この面接で茅野簫々先生が面接した。村松と書いてあって、身上調査みたいなのに、父親は著述業と書いてある。茅野先生は僕の親爺を知っているから、著述業で村松というと君は…と言いかけると、心理学の横山先生が、「君は調書にロビンソン・クルーソーとディケンズだと書いてあるが、それはどういうつながりがあるのかね。」と言ってね、茅野さんの話の腰を折っちゃうんだね。だからこっちは茅野先生の質問に答えたいと思ってるのに、その度に横山先生が腰を折る訳よ。別にロビンソン・クルーソーとつながりがあってディケンズを好きになっている訳ではなくて、ロビンソン・クルーソーは小さいまだ字の読めない頃から、叔母さんに何回も読んでもらったという好きさで、中学生になってからディケンズは自分で読んで好きになった。別にどうこういうつながりがあった訳じゃない。困っちゃってどう返事したか覚えてない。それでもともかく受かったから慶應へ来たというわけ。早稲田から慶應へ入ってみると、慶應しか知らない人は感じないかも知れないけど、軟弱だと思いましたよ。

――ほう、そうですか。軟弱ですか。それはまあ、今でもある程度言われるところかも知れませんけれども。

当時はもう日華事変も何年やってたし、太平洋戦争がその年に始まったんですからね。でも、慶應、ことに文学部というのは軟弱で、反戦というわけじゃないけど、永井荷風がどうのこうのと言っちゃって、およそ戦争気分じゃないわけ。かなり醒めてていて、今考えてみると面白い時代だったと思う。

一年に入ったわけだけど、文学部の予科生の間に、三田の専門課程の下部団体を作ろうという話が出てきて、それぞれ英文学会、哲学学会だ、とだんだん出来ていったんだけど、支那文学会だけは出来ない。で僕はどれに入ろうかと思って、ディケンズが好きで英文学会に入ろうとも思っていたわけだけど、別に積極的に英文学会に入るという気

にもならなかった。なんとなくぶらっとしてどこにも入らないでいると、おまえ、支那文学会を作ってみろよという奴がいて、じゃあ、作ってみるかということでやってみたら、五～六人集まったんです。

――藤田祐賢先生もその中におられた…。

そう、藤田なんかも入ってね。医学部の王君という留学生をたのんできて、中国語を教わったりした。その時に会長を奥野先生にお願いした。会長は何もしなくて、直接の先生は柴田さんという、予科の漢文の先生で、僕は教わらなかったんだけど、その先生は若い人なんだけどお願いして、中国文学に関する話を月に一回位してもらった。ところがこの人の話が面白くないんですよ。来月は金瓶梅の話だと言う。こいつは面白いやと思って、楽しみに行ったんですよ。ところがこの話があの金瓶梅をどうしたらこんなにつまらなく話せるかという見本みたいで、聞いているうちに退屈しちゃって居眠りが出ちゃって、目が覚めたら終わったというところでね。だから、中国文学に興味を持つとかいったようなことではなかった。

――梢風先生は特にそれに対して何かおっしゃったりはしませんでしたか。

何も注文はつけなかった。ただ、結局そういうわけで中国文学に入ることになるわけだけど、中国文学を選ぶんだと言う時には喜びましたね。それは兄弟が長兄と三番目の兄貴が英文学で、二番目の兄貴が経済学で、支那をやるのがいなかった。誰かやればいいなと思っていたらしい。だから僕が中国文学をやると言ったら大変喜んだ。

――その頃もうすでに梢風先生、奥野先生とはお知り合いだったんですか。

いいえ、まだ。知り合いになったのは僕が大学に残ってから。ずっと先の話で。僕は兵隊にとられる訳ですから。予科三年になって、その年が昭和十八年ですよ。予科三年が半年に削られて、しかも、大学生の徴兵延期という制度があったのが、その年に取消になるんです。学部へ入ると同時に徴兵検査があって、その時目方が今も四十キロありませんが、その頃も同じようなもんで、最初に検査で目方を計るんですが、昔の台計りというので、乗ると衛生兵が前の奴を計ったままになっている重りを取りのけるんですが、私が軽いもんだから、一つ取ってもビクリとも動かない、もう一つ取ってみても、まだ動かない。三つ目に、てめえ目方があるのかなんて言われた。丙種になりまして。

――丙種でも一応合格ではある。

そう、丙種までは合格なんです。だけどいきなり兵隊にはとらない。第二乙というのがあって、そのへんまで現役で取られて、その他はすぐに招集されるわけではない。ともかく免れたわけで、嬉しかった。最後に徴兵官というのが、丙種合格と言い渡すわけ、それを復唱するわけ、で元気に言わなくてはいけないと思ったし、嬉しかったし。「丙種合格」と大声で言ったら、国防婦人会というのが参観に来てて、くすくす笑うわけ。なんで笑うんだろうと思っていたら、あとで聞いてみると丙種合格のは面目ないというので小さな声で言ってたのが、私だけ元気に言ったのが可笑しかったらしい。徴兵官が「お前は体にどこといって悪いところがあるわけではないから、いずれお召しになるだろう、それに備えて体を鍛えておくように」と言う。いやなことを言うなと思ったけど、取りあえず嬉しくて、幸せで、大抵の奴はすぐに兵隊に取られると決まっていたから、その友達を東京駅へ送ったりしていた。兵隊に行くと決まれば授業に出る気なんかしないのは当然だから、学生は僕一人だった。宮島貞亮先生から中国語、長沢規矩也先生から近代学術概論を教わった。片方の宮島さんに初級を習っている段階で、長沢さんは清代学術概論を中国語で読んで、訳させるわけだ。これをどうやって、一対一でやってたか、長沢先生というのはベルが鳴ると同時に入ってきて、鳴るまで出てかない先生で、その間中一人でやったんだね。やれるはずがない。どうやったんだか。

――他の先生にはどういう方が――。

他の先生の授業という記憶がないんですよ。だから、全然さぼってなかったのか、なんだか知らないけど教わった記憶がない。で兵隊に行って一月で入院するわけで、十九年の正月は陸軍病院に入って、雑煮を食って、月に二回おしるこを食べて、世間では考えられないことだ。何もない頃ですからね。それから豚カツがでる。飯は銀飯ときている。天国みたいなもんで。名古屋の陸軍病院に三か月、それから大府にある陸軍療養所に入った。陸軍病院ほど食いものは良くなかったけど、飯は米でした。そこに終戦の翌年までぐずぐずして、食っちゃあ寝、食っちゃあ寝していて、二二年に出所したんです。取りあえず父の郷里の遠州森町へ行った。千駄ヶ谷にあった家が強制疎開にあって、足掛かりがない上に、親父も田舎へ逼塞してたんです。というわけで、しばらくそこで暮らしていたが、いつまでもこんな田舎に引っ込んでいたんでは話にならない。東京へ出たいと言ったら知人が会社を始めたから頼んでやってもいいと言う。それでやっと東京へ来て、そこで半年ばかりサラリーマンをやって、その内に親父が鎌倉へ出てきたの

で辞めて、学校へ戻った。これが二二年の秋で、早い段階で復学した人たちは、繰上げ卒業だの、飛び級など制度があったんだが、それが終わってしまっていて私は一年から。これは儲けもんでした。変に飛んだり、繰上げられたりすると、ろくな勉強をしないうちに卒業してしまったと思うんですけど、私は長々と兵隊で病院に入り、療養所へ入り、勤めをし、普段は勉強しないくせに、ああ勉強したいとそういう時に思うものです。腹一杯にしたくても出来ないという状況に何年かおかれて、それで学校へ戻ったというのは、えらい充実感を感じるものです、大学生活に。退屈な授業だと人が言ってもいても、私はそう思わないし、ともかく大変充実した大学生活を送った。

――その頃の先生が――。

奥野先生です。

――学生数はいかがでした？

学生数はだいたい一学年、二～三人から四、五人というところですね。で奥野先生に復学すると言ったら、大変喜んでくれて、そこからですね、奥野先生と私の付き合いの始まりは。昭和二二年に復学するというので挨拶に行って。だから、その三年間はやりたくても出来なかったことをかなり思いきりやった時期だと思う。だけどこの頃読んだのはバルザックだのスタンダールだのと言ったフランス、トルストイとかドストエフスキーとかツルゲネフみたいなロシアものなど順序も何もなく読んだ。ところが不思議と中国ものは読まなかった。

――それで中文の卒論は何をなさったんです？

卒論は何をやろうかという、あてがあったわけではない。やってないのだから。で先生が授業で京本通俗小説をやっていた。こいつは面白いと思って、それを選んだわけ。卒論にやりますと言ったら、「やってごらんよ」と言うので始めて、そしたら先生が君、これを訳してみたまえ。それに註と解説をつければ全訳補注京本通俗小説というので卒論にしてやると。出版の世話をしてやるから、それをそのまま本にするといい、と言ってくれた。それが『杭州綺譚』という名前で出る訳です。だから卒論が金になったわけです。ゲラを下駄はいたまんま先生に渡して、それが卒論だというんで。とにかく良いことかどうかはわからないけど。

――でも面白い訳ですよ。昭和二六年の出版（酣燈社刊）なんですね。ずいぶん昔に拝見して、いやあ、こりゃうま

い訳だなあ、と思った記憶があります。

誤訳はあるんですけど。学力が不足だから誤訳がずいぶんあるんですけど、玄人みたいに誤訳を恐れてないんです。勢いのいい、生き生きした文章で、いま読んでも良いと思います。他の叢書物に入れたりする時に、誤訳を直したんですが、直すよりも前の間違いの方が文として読むと面白いです。だから、翻訳というものがどういうものかと思いますね。普通に読む人はちょっとした言葉の間違いなんかを気にしているわけでないとすれば、そこにある日本語で出ている小説が面白く読めることの方がいいかも知れない。語学的な間違いがない退屈な日本語よりもいいかも知れないと思います。それはかなり手前味噌かも知れないけど。

――いや、私も本当にそうだと思いますよ。原文の持っている調子なり雰囲気、その面白さをしっかり掴んでいる翻訳ならば、ちっちゃな部分的誤訳なんぞいわばどうだってよろしい、そんなものはぶっ飛んじゃうというところがありますよね。

ともかくそんなことがあって、奥野先生の面白い面に接しました。後書だか解説のところで当時出ていた吉川幸次郎先生の『中国散文論』という本を出されて、その中で私の訳した京本通俗小説の話のことを論じているんです。それがどうもヘンだと思ったから、奥野先生に言ったら、吉川さんの方が間違いだ、「そんなこと、雨が降れば天気が悪いと言うのとおんなじだ、そう書いてやりたまえ」と言うんですよ。

――面白いですね。いかにも奥野先生らしいセリフで。

まさか小僧が大先生のことを、雨が降れば天気は悪いと言うようなもんだ、と書くわけにはいかない。そうは書かなかったけど、ともかくその中でそのことを指摘した。その本が出た年に第二回の中国学会が広島でありまして、先生は僕を連れて行って、お披露目にその本を持って行けと言う。何人か主だった先生にあげて、その度に奥野先生が紹介して下さって、その中には当然吉川先生もいた。「生意気に先生に食らいついてます。どうぞ叱ってやって下さい」なんて言ってるんです。

――なぁるほど、面白いですね、またそのへんのとこが。

で、第二日目に懇親会があって、その席で吉川先生がスピーチをして、自分がどうして中国文学をやるようになっ

たかというと、学生の頃に三田文学で奥野信太郎という人の文章を読んだ。中国文学に関するエッセーで、たいへん面白かった。聞くところによるとその奥野信太郎なる人は、慶應の学生であるという、よし俺もやろうと思って中国文学を始めたと言うんですよ。そうしたら帰りの汽車の中で奥野先生、胸を叩いて、「どうだい君、吉川幸次郎今日あるは僕のおかげなんだよ」なんて言っちゃって、それ以来、吉川先生とは肝胆相照らす仲になってしまった。ひどく簡単なところがある。

――非常に結構な人。

結構ですよね。あの先生の一つの特徴は〝結構人〟ということだと思います。これは後のことになるのですが、一緒に教授会に出るようになった。そうすると奥野先生は退屈嫌いだから、教授会なんか面白くないわけですよ。何専攻の、何年の、誰それが休学しますなんて、可決に決まってるじゃない。そんなことが次々出てくるから、とても我慢できない。「僕ちょっと逃げるからね。後でどこそこで待っているよ」なんて言って、すうっと出て行くわけです。そうするとそこにいる人がみんな、ほら奥野さんが逃げ出したと言って笑ってる。教授会が終わってからその喫茶店へ行くと、奥野先生「どうだい僕上手いもんだろう、誰も気が付かなかった」。誰も気が付かないと思っているのは本人だけ。まったく気楽なもんで、いい気持ちでそう思っているわけ。

――その頃は今の塾監局の第三会議室でやっていたんですね。

その第三会議室だから出口が横についていて丸見えなんです。

話が前後するけど学部を卒業するという時に、親父が大学を出てお前は何をするつもりだと言うんです。僕は兵隊から帰って、いっぺん就職したんです。科学通信の編集をやったんですが、科学なんて訳が分からないわけですよ。終戦後、まだ日が浅くて、新聞社でも雑誌社でも特派員なんか出していない頃だから、アメリカの通信社から記事を買っていた。その科学の通信サイエンス・サービスというのがアメリカにあって、それが記事を送ってきて、それを日本語に訳させて、見出しを付けて、新聞、雑誌あるいは個人に配付するわけ。それを整理して見出しをつけるのが編集者です。ところが、こっちが科学知識皆無だから、記事を読むと、びっくりすることばかり。そこで皆見出しが驚嘆すべきなんとかという見出しばっかりということになってしまう。科学記事というのは客観的、冷静な見出しで

あるべきだが、あなたのところの見出しは煽情的である、という文句が購読者から来る。そういう時は黙ってそれが机の上に置いてある。だから、だんだんいづらくて、辞めたんです。もう就職なんてコリゴリだったが、就職が嫌だとすると大学院に行く他はない。大学院に行きたいというと、親父が大学院で何をするんだという。何をやろうという当てがない。そこで自分でも分からないんだけど、児童文学をやりたいと言った。どうして児童文学なんてものが出てきたのかと思うけど、親父も別に何も言いませんでした。

――奥野先生はいかがでした？

当時は大学院の入試というのはなかった。先生に言って、先生がいいよと言ってそれでよかった。そのかわり大学院の授業というものもなかったです。先生の学部の授業を聞きに行きたければ行くというだけ。その時先生から、お前暇だろうから小遣い稼ぎに中等部の時間講師をしろ、と言われた。

――そのころ大学院に入るということはすなわち副手になるということだったんですか。

そういうことではない。やはり大学院生。中等部の非常勤講師を二年やった。大学院は二年で終了です。で中等部の教諭をあと二年やった。当時の中等部というのは草創期で、できたばかりだから教員がみな若くて、ほとんどが二十歳代で、みんな独りもんだからよく遊んだ。若いもんだから昼間中生徒と一緒くたになってかけずり廻って、夕方になると誰かが宿直だという。そうすると一人で泊まるのはつまらないもんだから、誰かを引きずり込む。もう、みんな定年になっちまったから時効ですがね、当時宿直部屋に麻雀があった。それで麻雀をして、その翌日誰かが宿直だと、昨夜泊まってやったじゃないか、お前泊まれよということになる。そうするときりがないわけです。当時私は鎌倉に住んでいたんだけど、一週間いっぺんも帰らずに学校に居続けたことがあった。そのころ大学院が終わると、奥野先生から日吉の中国語の授業も持たされていたんです。ところが、昼間中遊んで、夜麻雀しているわけだから、ともかく忙しくて日吉へ行く暇がないんです。それで日吉に電話をかけて、「今日教員会議がありますから」とか何とか言って休講にするわけです。それが何回か重なったんですね。そしたら当時日吉の文学部の係だった、関口研日麿君が心配してくれて、お前せっかく奥野先生が日吉の授業を持たせて下さったのに、そんなに休講ばかりしていてはしくじるぞと言うんです。彼は僕と予科で同級だったんです。そんなに中等部が忙しいのなら、いっそ大学へ引っ張っ

てもらった方がいい、日吉主任の石井誠先生の所に一緒に行ってやるから、頼みに行こうというんです。いくら友達でも実はとは言えないでしょう、遊んでるんだから。一緒に石井さんの家に行って、宜しくお願いしますなんて言って、帰ってきたんです。そしたら暫くして中等部長の今宮先生から部長室へ呼び出されて、「お前は石井のところへ行って、日吉へ頼むと言ったそうだが、奥野は三田へ連れてくるつもりなのに、余計なことをするんじゃない」と怒られた。この時も実はと言うわけにはいかない。すみませんと謝るほかはない。それで二年教諭をやって、助手になった。

――まあ、万事が鷹揚でゆったりしていた、古き良き時代だったわけですね。それがちょうど昭和二十九年頃ですか。

二十九年ですね。

――奥野先生はずっとその間村松先生のことをお目に掛けておられた。

見ていたんでしょうね。その間、藝文学会の発表をやりまして。これも今でも覚えているんですけど原稿作って、麻雀をやっているその席で、「俺、明日発表だから、いまから読むから聞いてくれ」なんて言って、麻雀のところで原稿を十五分以内で喋るんだからと言って、リハーサルをやりました。

――何についてですか。

『鏡花緑』。一番最初は。何を喋ったか覚えてませんが。ともかくいい加減なことを喋ったと思います。そんなわけで、なんとなく訳の分からないような具合で、大学に来ることになった。

――その後ですか、『紅楼夢』を始められたのは。

その頃になって、『紅楼夢』を読むわけです。これは面白い小説だと思って。『紅楼夢』にはかなりのめりこみましたね。何年かやったんです。そのうちに始まるのが『紅楼夢』論争というので、一九五四年ですよね。どうも中国の学者の言うことはおかしい、とその時分から中国の学者の言うことはなんとなく変だという感じを持ち始めた。でそのことは藝文学会でも発表して、論文にもしたかも知れない。そんなうちに五五年で、今度は胡風事件で。国民党のスパイであるという証拠の文献や手紙なんかが、出ているわけ。それを見ると何もスパイの証拠にならないようなものを、平気で証拠に上げている。おかしいなというわけです。一九五六年に中国に行った。当時親父がアジア平和委

員会の中国訪問文化使節団の副団長にされまして、団長は谷川徹三、副団長が石川達三と村松梢風で。梢風がはじめ、そんな役付はいやだね、平がいいねと言ったら、事務局の人が先生そんなことを言うもんじゃありませんよ、社会主義国で役付と平では雲泥の差があるんですから、と言われて、ではやるかと言って副団長になった。果たして行ってみてわかるんだが、平というのはバスもないような部屋で、副団長が次の間があるような立派な部屋で、役があるのとないのでは大違い。そんな訳で一九五六年に中国に行くわけです。

――先生は梢風先生の秘書というかたちで？

そう。親父は郭沫若と古い友達で、行くことになったら、親父が思いのほかの倅思いでね、私の倅が中国文学をやっているから中国へ連れて行ってやりたいと思うと中国へ手紙を出したらしいです。そしたら郭沫若から歓迎するから連れておいでという返事がきた。願ってもないことだから、行くことになるわけだ。ところが当時中国と国交がないので、外務省がビザを出さないわけです。仕方がないから、使節団はインドへまず行って、インドからヨーロッパに入って、ヨーロッパを経てソ連に入って、ソ連から中国に入るコースをとった。親父にとっては願ってもないパリへ行けるわけです。遊ばなくてはというわけだが、倅を連れていては遊べない、同じ遊ぶのでも倅が脇にいては面白くない。どういう工作をしたのか、いまだに分からないのですが、私を香港でおっことして行くんです。だからその団体と一緒に香港まで行って、香港で私一人で降りるわけ。香港はその当時まだ寂しかった。空港もほっ建て小屋みたいなところで。初めての外国だからどうすればいいか分からない。人の後をくっついて行ったら、一番後になってしまった。話によれば中国国際旅行社というのがそこで引き継いでくれるはずだったのが、その人が来ない。でとうとう乗客は私一人になってしまった。他の人は皆手続きをして出てしまった。イギリス人の役人が何かを言うのだけど、さっぱり分からない。そうすると、中国のどえらい美人のスチュワーデスみたいな人が、中国語でお前は英語が話せないのか、と言うから、全然駄目だというと、中国語は出来るかというから、少しは分かるというと中国語でここへ何を書きこめという風に細かく教えてくれました。とんだことで中国美人の世話になって、これはもうけたと思いました。そうしているうちに国際旅行社の人が来て、受け取ってくれて、翌日に移民局へ行きますと言うんです。移民局へ行ってまた、イギリス人がまた何とかと言うのです。わからないでぽかっとしていると、苛立って余計早口で言

うから全然わからない。で国際旅行社の人が私の代わりに応対してくれて、なんか汗をふきふき、小一時間かかってやってました。あくる日香港から列車に乗って中国へ入りました。深圳から入りました。羅湖という国境の町で、最後にまた旅券の審査があるのです。その前に私は列車の中で、飛行機で一緒だった宮崎竜介、白蓮夫妻に会ったんです。顔はお互いに知ってたので、僕はともかくこの連中にへばりついていようと思って、後ろについてました。その羅湖の最後の取調べで宮崎夫妻には若い男の秘書が付いていて、これがアット・ペキンと言ったら、ＯＫと言って、通してくれたので、私もともかくアット・ペキンと言おうと決めていた。だからイギリス人の役人が何か言った時、とにかくアット・ペキンと言った。そうしたら役人が腹をかかえてゲタゲタ笑って、ＯＫ、ＯＫと言って通してくれた。その後で汽車に乗ってから宮崎夫妻の秘書があなたは余程英語がうまいのか、と聞くんですよ。なぜだと言ったら、さっきイギリス人の役人と冗談を言い合って、笑っていたじゃないかというわけですよ。そうじゃない実はこれこれだと言うと、彼があなたの旅券を見せてみろと言うので、見せたら、なんだビザがないじゃないかと言うのです。今考えたら中国行きが許可になってないのだから、ビザがないわけです。これでよく羽田を出たもんだというのです。それに、香港でもよく通してくれたものだと不思議がる。そういえば香港の移民局の役人がビザ、ビザとしきりに言ってたのは覚えている。だけど当時の私はビザというものがどういうものか知らないから、ただ聞いていた。その時の秘書氏の結論は、要するにあんたが英語がからっきし出来なかったのが良かったんだ、つまりそこで英語が出来れば役人が何を怒っているのかがわかって、多少おどおどするはずだ、そしたら帰国させられるのは免れなかったと言うのです。語学の出来ないことの効用というのは、時にはあるものだと思いましたね。

――いやぁ、面白い話ですね。〝知らぬが仏〟と言いますが、それを地で行っちゃった。

とにかく中国に入って、親父達がヨーロッパやソ連を旅行している間に、いろいろな団体にくっついて、いろんな会合に出ました。ある席で兪平伯に会った。僕が『紅楼夢』をやっているのを中国側の人が知っていて、兪平伯先生が来ているから、紹介してあげると言われたのです。兪平伯は『紅楼夢』問題の時に約半年にわたって連日のごとくに新聞、雑誌あらゆる機関で猛烈な攻撃にさらされて、最後に自分の考えは間違っていた、それを指摘してくださった同志に感謝する、これからは社会主義に向かって歩まなければならない、というような自己批判をして決着がつい

たんです。で兪先生に会うと、お前は『紅楼夢』問題を知っているか、と言うので、勿論知っていると答えると、どう思うか、と言うから、私は先生のご研究は正直のところ趣味的にすぎると思う、しかし、先生に対する攻撃者の論文というのはあれは政治であって、文学ではないと言ったら、先生は大変喜んで「対（トイ）、対（トイ）」と大きな声で言うんです。だから自己批判した人が全然自分のやり方が間違っていた、相手の言うことが正しかったなどと思っているとは限らないことが分かった。これは中国勉強になりました。

――いつでも政治と文学との間には境目がなくて…。

なくて、文学というのがいつも政治に踏みつけられている。しかし、文学者の方もしたたかなもんで、そこで同調するようなことを言ってもそれは本心から同調しているわけではない。という複雑なものが政治と文学の間にあるということをつくづく思いました。

――それはそもそも中国においては古くからそういう関係にあったということですね。

当時はそこまで考えることはできなくて、これは一体どういう訳なんだろうと思っていたわけです。そうすると次々といろんなことが起こるわけです。その翌年に反右派闘争で、やがて大躍進になるわけです。素人目に見たって大躍進というのは出鱈目なものだというのは分かったはずです。僕なんかの目で見ても、十年でイギリスに追いつけ、追い越せと言ったって、出来るはずがないじゃありませんか。田舎の農村までが炉を作って鉄を生産している、これを寄せ集めれば、大変な量になって十年でイギリスに追いつき、追い越すのも夢ではないと当時の日本の中国研究の専門家がそう言ったものです。でも素人の私が考えても、子供が庭の炉で鉄を作ったって、そんな程度の鉄とイギリスの生産している鉄を量だけで比べることが間違いであるということが、経済音痴の私が見たって考えられることを、専門家が認めたというのは、日本人の考えというのは一体どうなっているんだろうと謎だらけになってくるんです。果たせるかな大躍進も大失敗でしょう。そして同時に行われたのが業余作家運動です。業余作家の作品を人民文学で読んでみても、ろくなものはない。それを日本の専門家が中国では農民兵士にいたるまで文学を書くようになった、大変な底辺の広がりだ、そうするとその頂点の高さというのも大変なものになるなんて。冗談じゃない、文学というのはやる人が多ければ、その中からすぐれた人が出てくるというほど簡単なもんじゃない。言葉としては言えても、

文学というものを本気で考えているとは思えない。ろくなものは出なかった。塵のような作品がいっぱい出ただけだった。鉄屑がいっぱい出来たのと全く同じじゃありませんか。

――本当に一体どうなっているんでしょうか。彼らがもしも、本当に本気でそう言ったとすれば、それはもう余りにもオソマツ。実はそうは考えていないのだけれども、そう言ってみせているのだとすれば、今度は余りにも狡くてイヤらしいということになる。しかも後者の方でしたならば、まあまだしもそれなりに分からないではないけれども、前者の方だとすると、これはもう救い難いですよね。

で、とにかく大学に移って本式に奥野先生の弟子になった訳です。先生の教育はなかったという訳ではないけど、一般の先生の教育とはずいぶん違ったようです。方法論というようなものは全然教えなかったし、自分の意見を押しつけるということも全然なかった。文学について語ることはあったけど、雑談の中で、話の調子でそっちの方へ流れていった時にそれについて語るのであって、特別に語ることはなかった。ヒントとして、その中に卓抜な意見があったと思うから、汲み取っていかなければならないはずであるけれど、雑談の中で出てくるのであり、奥野先生の話は無類に面白かったから、こっちは話に興じてしまって、肝心な先生の感想や解釈というものを見逃してしまうことが多かった。だから学ぶとすれば非常に難しい型の先生でした。教えるぞと言って教えるわけではない。

――そこへいくと、京都の吉川幸次郎先生なんかはずいぶん違っていたようですね。

そう、吉川先生とちょうど対照的だと思います。もう、ずいぶん昔のことになりますが吉川先生が上京されて、東京の若手の研究者たちを宿に呼んで話をしたことがある。四時に来い、と言うから四時に飯田橋あたりの旅館に行った訳です。そうすると先生は外出中でまだ帰って来ていない、やがて帰って来た時は夕飯時になっている訳です。そうすると先生のお膳が運ばれてくる。こっちも飯時に呼ばれたのだから、飯が出ると思う。そのうち出てくるだろうと思ったら、先生のしか出ないわけです。先生は失礼するよと言って食べる。こっちはただ見てるだけ。食べ終わって、お膳がさがると、さあ学問の話をしようと言うのです。そうして始めるわけです。あれは違うと思いましたね。同じ先生でもこんなに違うもんかと思いました。

――奥野先生はどうだったんですか。

中国文学の話も出てきたけれど、さあするぞ、なんてことは一回もなかった。それに、先生と一緒に何か食べたりしてお金を出した記憶はないですね。払おうとしたりすれば先生が嫌がるのは分かっていたから、どうもありがとうございました、とは言ったけれども、いつでもご馳走になっていた。まして僕らに眺めさせて自分だけ食べるなんてことは絶対になかった。こんなに面白い先生もなかったと思いますよ。銀座を歩いていて「この店に入ってみよう」と言って、入ったことがある。初めての店で、女がお仕事は何をしてらっしゃるんですか、という。そうすると先生が「僕は刑事だ」と言う。どう見たって刑事に見えないから「あら、ウソばっかり」「ウソなもんか」てなことになって、「じゃあ、これを見てごらんよ」と定期入れから身分証明書を出して見せる。当時先生は法務省の何とか審議会の委員をしていた。刑事の証明書が法務省から出ているのも変だけど、女は知らないから、あら本当だということになって、今度は僕のことを、じゃ、こちらは、と聞く。すると先生が「こちらは村松梢風先生だ」。ところが女は「村松ショウ?」なんて言って、知らないわけです。先生、弱っちゃって、だけど機転のきく人だから「君、残菊物語は見たことあるだろう」「あるわ。花柳章太郎と水谷八重子のでしょう」「そうそう、あの芝居の原作者がこの人さ」「わたし、ああいう話を書く人はもっとお年の方かと思ってたわ。お若いのに感心ね」なんてほめられたりしてね。すっかり村松梢風と刑事になって、女はワケがわからないとくるから、頓珍漢な話で転がっていくわけです。あんなにおかしかったことはありませんね。

――実は私などにも同じような経験が何度かあるんですよ。先生のお供をして、バーや飲み屋に行く。すると先生、女に向かって「この人、中国から来た留学生で日本語がまだ分からない」なんて紹介してしまう。仕様がないから私は留学生になりすまして、先生とは中国語で話します。女とのやりとりだって先生が間に入って通訳してくれるのですが、女の方は大まじめでいろいろたずねてくる。私の方もだいたい酔っぱらっていますから、いい気になってそれらしく演技するわけですが、奥野先生ってそういうアソビやらイタズラが大好きな方でしたね。

ともかく先生は仕事の中で勉強していかなくては駄目だと、しきりに言いました。そして、いろいろ仕事を持って来てくれるわけです。確かにいろいろ調べなくては書けないから、勉強になりました。そして今考えるのに、いろいろ自分の頭で考えながら、資料を使うということになるから、悪くなかったと思いますね。資料があるからといって

安心してしまう訳にいかないようなことにも出会ったりする。だから資料の性格について考えなければならないことにもなる。

――奥野先生は特にこういう資料がある、ああいう資料があるとも仰言らないわけですよね。

あんまり言いませんでした。自分で探させましたね。だから、我流といえば我流ですよ。私が多少の学問があるとすれば。しかし、中国文学の場合、決められたコースで調べていって、果たして探究したことになるだろうかという気はしますね。とにかく、型の決まった研究方法というのが、確立しすぎていると思います。私の場合、大きな問題にぶつかるのが次の文化大革命です。その第一の日本における衝撃が、郭沫若の自分の著作はすべて焼き捨てろという声明です。これが大反響を起こしたわけです。そしたら東京新聞から、それについて書けという注文があったので書いたら、それを中央公論が見て、論文を書かせてくれたわけです。だから私の第一作というのが政治絡みだったというのは、不思議な成り行きです。結局それが『毛沢東の焦慮と孤独』（中央公論社、一九六七）という本になる訳です。

――最初に書かれたのが「整風運動と中国の文化」でしたね。

そうです。

――それは中央公論の一九六六年の七月号。

日本にいまだ文化大革命という言葉が伝わらなくて、整風運動と言っていたんです。ともかく大変なことだと思ったわけです。歴史的な問題だ。中国文化の根本に関わる問題だと思ったから、えらいことになったと書いた。そしたら北京留学していた安藤彦太郎が間もなく帰って来て、読売新聞に日本で中国の出来事を騒ぎ過ぎると書いたんです。読売に電話をして反論をしたいと言って書かせてもらった。騒ぎ過ぎると言うけれども、大事件ではないか。いろいろの証拠を出して、これはどうなんだと反論した。さらに安藤さんがそれに反論するということで五回位論争を繰り返しました。その時私が安藤さんを狡いと思ったのは、安藤さんはこう言われるけど、しかしこうではないか、という言い方をこっちはしますよね。そうすると安藤さんは私が出した疑問には答えないで、自分に都合のいいことばかり言う。それに対してまた「しかし、こういう事実があるではないか」と反論すると、村松はすぐ「しかし」と言う。

人の言うことを素直に聞かないから日本のインテリというのはいやだと言うんです。だけど疑問があった時に「しかし」と言うのは、ここから学問は始まるわけだから当然じゃありませんか。ともかく文革というのは中国の旧文化を否定するんですが、その否定の仕方がはなはだ旧文化的な否定の仕方ですね。依然として皇帝の専制だと思った。この事件は私のその後の行き方を決定するものでした。この時奥野先生は、奥野先生というのは無粋なことはきらいな人でしたからね。論争というのはどうしたって無粋ですよ。だから論争をするような問題の提出を決してしません。だから論文というものは書かないわけです。いつでも随筆です。論文というのはどうしても無粋ですもの。粋に論文を書きたいと先生は考えていたらしいけど、実現しなかったのは無理ないと思います。どっかで論争的な要素をもたないというのは不可能なことだ。だから自分がやらないで人をけしかけるわけ。「君、大いにやりたまえ、がんばれよ」と言って。吉川さんの時と同じで人にやらせる。半分けしかけられたみたいで、夢中になってやりました。私の生涯の中で、ある問題に没入して、前後を忘れてやった時期というのは文革の時ですね。

――それとほとんど並行してますか、『濁流』という小説を書かれたのは。だいたい、いろいろ書いておられた時期なんですね。

あれの後だと思います。『毛沢東の焦慮と孤独』を書いて、一区切りにしますね、そのあとだと思います。

――待って下さい先生、その『濁流』が『文学界』に掲載されたのが、一九六六年三月号ですよ、間違いでなければ。「整風運動と中国の文化」を中央公論に書かれたのが、同じ六六年の七月号なんです。

そうですか、記憶違いです。書き上げた直後位から始まるわけですかね。

――私は先生が『濁流』を書かれたころのことは非常に印象に残っています。たいへん打ち込んでおられた。

そうですか。

――非常に神経が尖っておられたという記憶があります。

ともかく、助教授だったでしょう。当時の助教授というのは気楽な立場でしたね。文藝春秋に杉村君という慶應の文科を出た人がいて、君は小説が書けると思う、と言うんです。書いてみないかと。専門家からそう言われる限り、おれは書けるんじゃないか、やってみなくてはいけないと思った。やるにしてもいきなり創作ということは出来ない

から、自分の一番知っている中国の歴史ものだと思いまして、則天武后の時代を背景にとって、その中の酷吏の話を書きました。

――ええ、来俊臣という凄い奴の話でしたね。これは特に奥野先生ではなくて、杉村さんという方のお勧めだった訳ですか。こういうのを書いているということを奥野先生はご存じでしたか。

言いました。やってみたまえと言われた。奥野先生にいちいち相談する訳にはいかないから、国文の檜谷君におれは何回でも書き直すから、君がこれでいいというまで読んでくれるかと言ったら、読んでやるというんです。それで三回位書き直しました。そのようなことをするのは脇道のようですが、文学というのは書く者の立場というのが全く分からないというのでは、分析できないと思う。自分が体験してみなければ分からないようなもの、何と言い表していいか分からないけれども、そういう体験があって、これがやはり作品の中にはいろいろな形であるはずだと思う。それを類推する能力を身につけるきっかけにはなったと思う。翌月の『文壇時評』には各紙が相当大きく取り上げた。だから気を良くして、小説を書いていこうと思った。そうしたら間もなく奥野先生が亡くなられて、こっちが教授になっちゃう。教授になってから亡くなられたわけだけれども、一人しかいない教授になるわけです。ついそんなことに追われて、小説を書いてみたいと思いながら、書かず終いですね。

――しかし、一連の歴史ものは書かれましたね。『中国列女伝』（中公新書、一九六八）とか、『瞽説史記』（中央公論社、一九六八）、『五代英雄伝』（中央公論社、一九七一）…。あの頃は、中国では文学より歴史の方がずっと面白いなあというようなことを仰言ってましたね。

そうですかね。また、そうかも知れないとも思うな。中国人というのは、それぞれ理屈のある人間だと思いますよ。我々みたいになんとなく、というのとずいぶん違う。日本で出来る小説というのは、日本文学に素養が浅いのに、そういうことを言うと反発されるでしょうけど、代表的なのは宮廷の女流文学。一体人生の何を書こうと思っているのか、わからないですね。たとえば『とはずがたり』という作品があるようですがね。後深草上皇だったか、その息子のお妃かなにかで、その両方の女みたいなもので、なんとかの大臣とも関係があるし、坊主が祈祷に来て、その坊主ともできて。じゃあ、淫蕩で多情かというとそうではなくて、ひどくひと筋で純情らしい。それが成り立っていると

いうのが日本文学の特徴のような気がする。

――とにかく非常に情緒的で、しっかりとしたストーリーといったものがない。

ストーリーなんて筋の通ったものはなくていいらしい。しかし世界的に太い筋なんてものがなくなってくると、それが取り柄になってくる訳かもしれない。じゃあ、筋がなくていいかというと、自由貿易だってやはり約束というか筋がまるでなくていいという訳にはゆかない。それぞれの国が文化を背負っているし、事情があって、自由貿易オンリーでいっている国はない訳だけど、原則として自由貿易というものに沿わなければいけない。なんとなく、なくてあるみたいな風になってきているような気がする。

――それからまた、政治の問題も含めて社会時評やらマスコミ批判なども盛んに書いてらっしゃる。そういう関連も文革問題に突っ込んでやられた結果でしょうね。

それは『毛沢東の焦慮と孤独』などを書いたからでしょうけども、注文が時々来るんです。私のことだからデータも揃えずに、勘どころみたいなもので書いてるだけのことです。要するに文学については、こういう勘どころで考えるようになって、結局奥野先生の仕事の中で勉強していかなくては駄目だということと、先生の文学というのは文学史的な、あるいは一定の方法論による文学論ではなくて、その作品、その作品に関する先生の感想解釈でしたよね。といったようなことで、ひょっとすると、これは先生が作り上げようと思っていた形になったのかも知れないという気がする、近頃。

――村松先生の場合、あくまでも理屈でというか理詰めで押して行こうとなさる。そこでしょうね、奥野先生とのまず大きな違いは。

僕には、先生のようにぱっとひらめくところはないですね。だからどうしても理屈で押すようなところがあるかもしれない。これは性格の違いだと思います。小さい頃から理屈っぽい、いやな子だって叔母が言ってましたよ。「なぜ」とすぐに言ったと。大人には答えられないような「なぜ」というのがいろいろありますよね。それをしつこく「なぜ」「どうして」と言ったらしい。環境の違いもあったでしょう。奥野先生の時代というのは、本当に大正のいい時期だったと思います。妙に弛んだ時代。そして、そのころ浅草に住んでいたんですから、芝居は近いし、オペラはある

し、手近にあらゆるものがあった。そして後には財産が思うようになった。これは特殊な事情だけれども、稀に見る幸運の人だったと思いますね。

――中国文学研究についても奥野先生の時代というのは、いわばまだ啓蒙期といいますか、ふれる範囲が広く全体に渡っていますね。

全体を語ることのできた時代ですね。文学史みたいなのを書けたし、吉川先生にしても、何が専門というよりは、あらゆることについて語った時代です。啓蒙期の最後になるんでしょうね。その次になると専門、専門になってしまう。

――今やその意味では完全に専門化してしまって、非常に細部にわたっていく。またそうでなければものを言えないような時代になってしまいました。

それでいて中国文学の研究というのは進んでいるかというと、僕は疑問に思います。なぜかと言うと、中国文学の中にある非常に古い系統的な学問の仕方というのが中国の学問の中にはある。思想学文学の領域の。つまり万巻の書を読んで、それで実証していく。詩なら詩を詩として、楽しんだり鑑賞したりすることは学問にならないのは確かかも知れないけど、詩というのはそんなに実証するものではないと思います。それを無理に実証する、教訓を持たせる。その伝統的なものは『詩経』から始まっている。『詩経』の毛伝なんてのは、実証的であろうとするための、とんだ見当違いの見本ですね。しょっぱなの関雎の詩からして、后妃の徳をたたえたりなんて、文王だのお妃がどこから出てくるんです、あの詩の中から。ところがそういう注がついたりしていると、その注をいっしょけんめい読んで、鄭玄がこう言っているだとか、朱子がこう言っているということが、学問になるというわけだ。ところが、それがとんだ牽強付会で勉強すればするほど詩の真実から遠くなるというところに問題があるわけです。関雎は文王夫妻をたたえたなんて、さすがに今ではそんなことを本気で思ってる人はいないと思うけれども、いまだに詩をやる人は詩をやる人で古い注でなんとかして解釈をつけないと、この論文は実証が足りないなどと言う。だけどその注なるものが、そういう伝統の上にできたものじゃないですか。そうするとまず、資料の検討から始めなければならないはずでしょう。そういうことについてどこまで考えているかということです、彼らが。

――この世界ではいわば常識だということになっていて、全くそこに疑問の眼を持たない。その常識なるものをまずは疑ってみろということですね。

一番指摘しやすいことは、唐詩の研究家は、たとえば天宝時代の詩について書く時に、天宝三年以降は天宝何載と書きますね。玄宗の親爺様だか何かが亡くなったのにからんで、その人の名前を避けるという意味で年というのを載と改めた。『唐書』か何かの天宝三年のところに「年を以て載と改む」とありますね。それ以後は天宝四載、五載と数えています。それは唐の時代はそうだったかも知れませんよ、今のわれわれがなんで玄宗の親だかなんだかの名をはばからなくてはいけないんですか。それをなんの疑いもなく、天宝十二年と書いた論文があれば、無学だなんて言う。その方が正統な学問だと思ってる、というようなところが中国学にはある。

――その正統な学問というのが問題なんですね。これに対しては一片の疑念も抱かない。

鄭玄を「ていげん」と言ってはいけなくて、「じょうげん」と言わなくてはならない。孔穎達だって「こうえいたつ」と言ってはいけなくて、「くようだつ」と言わなくてはまともじゃない、と思うこの感覚。杜預が「どよ」で、それじゃ杜甫がどうして「どほ」ではなくて「とほ」なんだ。それにすべて通じていくわけです。要するに儒教ということになるのですけど、これこそまっとうな生き方だというのが儒教にありますね。いま言った読み方なんかも「そういうことになっている」だけのことを教わって、疑いもなんにもしないで覚えるだけじゃありませんか。その生き方に沿った研究というのが、自ら生まれるもんで、ところが文学は多様で真面目なものだけとは限らない。それから外れたものが真面目では解釈できないことになる訳です。真面目そのものが問題である上に、その真面目から外れた場合に、解釈を誤ることが非常に多いということを考えもしない世界がいまだに続いているというのは、僕は中国思想文学の研究は化石の世界だと思いますね。

――ちょうど一昨年ですか、日本中国学会で「中国学の未来像」と題するシンポジウムが行われて、村松先生がパネリストとしていろいろそういう基本的な問題について発言なさいましたね。

問題を提起した。その時に我々の中国研究というのは根本的に間違っているのではないかと。なぜならば、文化大革命の時に、この中国学会は今こそ中国の学者と交流せねばならぬ、という異例の大会決議をしたんです。と言うこ

とは文革がなんであったかということに関して、まず認識を誤っている訳です。それから、あの世界が言論統制、思想統制の非常に厳しい世界であるということに対して、認識を誤ってます。従って、言論統制というのがどういうものであるかということに対しても認識を持っていない。それから独裁というものがどういうものであるかということに関しても、認識を持っていない。それだけの認識を持ってなければ、これは根本的な誤りではないかと。ということからしても我々がその大会決議をしたということは、学問の自由な交流というものについては、全然考えていない。統制社会の学者というものがどういうのかというのを少しでも考えていれば、今こそ交流せねばならぬということなど出てくるはずがない。ものすごく統制された時期にこそ、その国の学者と交流しなければならぬとはどういう意味なのかということを、考えてもみないとすれば、我々の中国に対する根本的な認識が誤っているということは、間違いないでしょう。従って我々の研究というのは根本から考え直さなければならないのではないかという問題を提起した。ほとんど無視です。

――この問題はまた、儒教批判を最近先生が一貫してなさっておられるのと繋がってくるわけですね。

結局そういうことになるわけですが、どうもそういう中国の仕組みというものを考えなければならないことになってきた。この中国の建前的な、表面に出る原則というものは、漢以来おおよそ儒教ですね。ところが人間が一つの主義なり、思想なりで、通せるもんではない。それは不自然であり、いろいろの不合理が生じていて、破綻をきたすというのは、ソ連や東欧なんか、それで証明されていると思うけど。儒教はなぜ、それを二千年に渡って維持することが出来たかといえば、儒教が権力の思想になったからです。西洋の思想が力として及んだのが、清末になってからで、それまでは中国の権力が、西欧に対しては独立した世界を形成していた。その権力と一体になったからこそ、続いた思想であって、だから、実情としてはそこにいろいろの破綻が生じ、いろいろの不都合もあったのだけれど、権力がその思想の名において、押さえていたというだけに過ぎない、ということを考えるわけです。

――文学に限って言っても、そういう統制の中で、いろんな歪みを持ってきている。

中国人だって全面的に儒教だけを信じていたわけではない。自分独自の考えを持つ人だっていたと思います。だけど、思想と権力が一体になって存在する社会の中で、そういう自分の考えを出すということは非常に難しい。しかも、

中国の文学というのは士大夫の文学である。だから体制の担い手の文学であり、また体制予備軍の文学ですね。そういう中で体制から外れた自分の考えというのを表現しようとする場合に、それとなく、表面を体制に順応するような形を見せながら、その中で巧みなレトリックで、それを組み換えて行くという形をとるということはあり得ることだと思う。その点が日本の江戸なんかと違うところで、日本では庶民が文字を持ち、文化を持ちました。そういうのは御上と別な世界の住人で、それは当然行き過ぎれば、罰をくらったりすることもあるけど、ともかく別の世界にいるのだから、ぶちふざけることが出来たわけです。だけど中国の文学者は、かりそめにも士大夫、知識人である以上、士大夫としての態度というものを少なくとも持ち続けているような恰好をして見せなければならない。従って、それを読みとっていくというのはかなり難しいことだけど、さっき言ったような、自分でものを書いてみればある程度推測がつく。どういう表現をこういう時にするだろうというのような、体験的なものがあれば、こういう表現は作者のこう思っていることだと。これは一つの感覚ですね。書いてみなくてもマトモに文章が読めればわかるはずですよ。文学を感覚抜きで論じたとすれば、これは間違いだと思う。文学は芸術ですもの。

――つまり、芸術というもの自体、本来人間の感性に根ざしたところの営みですよね。ですから当然文学という芸術にとって絶対不可欠なのは、文学的感性の問題だということになる。ところがその文学的感性というものが全くなくても、文学研究なり評論が出来るのが中国文学の世界。

中国文学の研究の世界ではそれが出来る。そういう不思議な世界だ。つまりリタラチャーのことを文学と訳しますが、ここら辺からごたごたが生まれたと思います。文学という芸術をどうして学と訳したか。そうすると文学を研究する者も文学者だし、文学を書く者も文学者ということになる。ところが文学という学の字がついているだけ、研究者は束縛されていると思います。学でなければならない。文学は評論ではない。確かにそうです。だけど、文学というのを感性でとらえ、感覚で解釈することを抜きにして、文学というのがあり得るか、文学という芸術があり得るかと言えば、これはないに決まっています。その芸術を扱う学者が、芸術を理解できなくても、解釈出来るかというとこれは出来ないに決まっています。ところが中国文学の世界に関する限り、僕は文学は分からないから、なんて平気で言えるというのは、異様な世界です。訓詁注釈考証だけが学問だと思っている。

――それこそが唯一正統真当なる学問文学研究であると信じ込んでしまって、まるで疑ってみようともしませんね。

だから、李笠翁の『肉蒲団』なんて、これは見れば分かるというもんですよ。これはポルノ小説ですよ。少なくとも艶笑小説。これを新しい性道徳を提唱している作品だなんて言うことが出来るんだから。そんな言葉が通用するのは我々の研究者の世界だけだと思います。

――まことに不思議な世界であるとしか言いようがありませんね。

で、どうなんでしょうか、中国文学研究の未来についてはどうお考えですか。多少は先生が考えていらっしゃるような良い方向にいく可能性があるんでしょうか。

かなり長い時間をかければ、ある程度変わっていくとは思います。なかなか変わらないというのは、確かに中国文学には師匠から叩き込まれて、方法論を教わって、研究していかなければならない要素というのはあると思います。一定の枠組みの中で二千年続いて書かれた作品には、ことにその作品自体が古典を踏まえてるなどという場合は、いくらでもその要素があるわけです。じゃあ、その踏まえた伝統の中だけにあるかというと、中国人の創作能力というのは非常に豊かなものがあって、科学でいったって、いろいろな発明や発見をヨーロッパより早くやっているわけですから。そういうことによっても文学の上で、新しい思考の開拓が完全にないということは有り得ないことです。ただ、文学を枠組みの中で考えたから、変化も隠微な形で行われる。きつい枠組みの中で存在するための隠微な方法によらざるを得なかったという、難しさがあった。そこは現在自由である我々が読み解いていかなければならない使命といったものがあるはずです。だけども、非常にきつい方法論というものが成り立ち得る性格を持っていることは、確かだと思う。ということで師承の学的な性格があって、その方法が次々と伝えられて来ているわけです。偉い先生の教えを受けたという人達が、今度は新しい人達を教育している。だから、大学院生なんか見ているとかなりな発想を持った学生でも、大学院に残って、たとえば詩の研究をしていくと段々そういうものが磨滅していってるのがわかるんです。やはり学会の動向というのを彼らは敏感に感じとりますから。そして、事実自分の感性でとらえた論文を出した場合、厳しい批評を受ける。先輩から実証が足りないと言われる。私はそういう席に出たことがありますけど。詩に関する論文でしたがね。先輩の大先生達が、この点については実証が足りない。出てくる批評が全部それなんで

す。そうするとそれを書いた人はそういう面を削ぎ落としていくじゃないですか。それが続くことによって次第にそういう人も新鮮な感覚を失っていくわけです。

――それはしかし大問題ですね。それこそ先生が言われたところの、非常に逼塞した枠組みのなかでの化石の世界、ということになってしまうじゃありませんか。困ったことですね、それは。

ところで奥野先生の話に戻りまして、今度『随筆北京』が東洋文庫に入るというので、私も久しぶりにざっと読み返してみましたが、先生が解説を書いておられますけど、如何ですか、奥野先生の四十歳前後の頃に書かれたものとしては、すばらしく光った発言というのがあって、私も改めてびっくりしたんですが。

そういう中国人に関する特殊な精神構造に触れたものもありますが、それ以外に当時の北京の息遣いをあれほど見事に伝えたものは他にないのではないかと思う。こういう意味で記念碑的作品だと思います。それを筆にすることが出来たのは奥野先生しかなかった。つまり先生は五つの頃から素読をさせられて、十五の時には『海潮音』なんかの漢訳をしている。ということは漢学の素養は並大抵ではなかった。それを感覚としても操ることが出来る程の域に達していたということだと思う。しかも伝統的中国詩にはまるものではないような性格のものを漢訳しているということにおいて。

――つまり並大抵ではない文学的センスの良さということでしょうか。

だから、単に叩き込まれたものでなくて、叩き込まれてはいるのだけど。

――そういう人はたくさんいたでしょうけど。

それに対して常に自分でも嫌だったと言っている。反発しながらもその方法論というか、漢字の文学というものの性格というものは、骨の中まで染み込むほど体得していたということでありながら、それと同時に教えられたままの感覚では受け取ってなかったということだ。ここが重要な点で、しかも先生は後のあり方でも分かるけど、早くから与謝野夫妻のところへ出入りした。これはひとりでにそうなっていくんだ。意図して師事したというより、ちょっとしたきっかけでひとりでに入っていった。それでいて、先生が放蕩した時に与謝野晶子がひどく叱るといった関係になる。先生は生来の詩人だったんでしょうね。

――詩人は感覚でぱあっと言えばいいわけで、理屈を言ってはいけない。

だから、漢訳の『海潮音』とかは、漢字の世界でないものを漢詩に訳すことが出来たんだね。『随筆北京』というのは北京における中国の文化の推移そのものが描かれている。長い歴史の堆積した世界を、その息遣いまで伝えるのには、またとない人を得たということですね。

――また、奥野先生ご自身、北京がこよなく好きであられた。魅了されておられましたからね。

だから、好きだからこそ、それが先生にとってはたまらなく良かった。だからこそ、ああいう形で北京の裏町の息遣いというものを伝えることが出来た。あの文章が残っていなければ、あの時期の北京というのはわからない。遡ってみたって、北京のそういう側面を伝えた文章というのは他にないでしょう。

――大勢の人々が行っており、いろいろ書かれてはいるわけですけど。

北京のことについては大勢が書いているはずだけど、大陸浪人がいっぱい行ったし、学者も行ったし、北京をこういう人達が書いている場合もいろいろあるけれども、あの北京の雰囲気は書き残していない。

――その意味ではやはり卓絶したというか、大変な人だったわけですね。

そう思いますね。あの人を得なければ、当時の北京のある側面、すでにそれだけが北京ではなかったのだけど、一つ裏町に入ればむかしから続いていた庶民の息遣いを伝えたんですからね、これは先生の大きな文学的功績だと思います。

――その随筆集の中に「支那の知識人」という文章がありますが、こんど読み返してみてびっくりしたんですけれども、例の『肉蒲団』の作者の李笠翁について「満身これ戯作者気質と思はれる李笠翁」なんて表現がポーンと出て来るんです。実は私がこの数年来取りつかれているのがこの作家でして、彼が中国においては突出した戯作者であるという視点を提示しているわけです。ところが一部の研究者たちにはこれが理解できないらしくて、論争のようなことになっちゃいました。奥野先生はすでに五十年ほども昔に、彼を指して戯作者だと言ってのけておられたんですね。本当にびっくりしました、これには。今さら気づくというのも、実に迂闊な話ですが。そしてまた、中国知識人の伝統精神の持つ複雑さといったものを、ちゃんと説いておられるのです。

これが一筋縄でいくもんでないということを、見抜くのは卓抜な感覚ですよ。中国の知識人の精神構造、そのしたたかさと、したたかさの構造といったようなものまで見抜くというのは博い学問と鋭い感覚がなければ出来ることではない。

――そういうわけですね。そういうとこまでがあまりにも分かっていないのが、今の中国文学研究者ではないでしょうか。

そう思います。したたかだということまでは言うんですが、どういうしたたかさの構造であるかということについてまではなかなか言えないものです。

――また日本人と中国人の違いというものの、見極め方ですね。

中国の知識人には日本人の知識人にない、したたかさがあり、それには特殊な構造というものがあるのだということを書いているんですからね。

――およそそこのところが今の中国研究者には分かっていないものですから、先程の李笠翁などについても全く見当はずれになってしまう。

私など五十、六十になるまで考え続けて、ようやくある疑いというか、疑問という形で突き当たったところを、奥野先生は四十位で初めて北京へ行った段階でつかまえてしまったわけです。だけども惜しいことに彼は詩人だからそれを論文にしない訳です。ある感覚としてそれをつかまえる。そうするとそれは論文になるのではなくて、随筆になってしまう。これは惜しいことだけど仕方がありません。しかし、学者というのはやはり論じなければいけないので、論じてみせなければ学者ではないと思う。という意味で、奥野先生は学者としては欠けるところがあったと言わなければならないと思います。自分の先生だからといって、身贔屓してはいけないと思います。そういう点で吉川さんはいちいち論じましたよ。だから、西の吉川、東の奥野と言ったって、権威が吉川先生の方へ行ってしまったのは仕方がないと思う。しかし、吉川先生は自分にないものとして、感じたんでしょうね。ＮＨＫブックスの『中国文学十二話』というのは、俗向けの本ですよ。でもその中にやはり随筆と同じように、何気なしに書いている。吉川先生は新説と言ってるけど、新説ではなくて感覚でとらえた、中国文学の本質ですよ。それを吉川先生は新説としていうふう

に言われるのは、これは学者だからですけど、それをやはり吉川先生は感じているんです。そういうことについてはもっと詳しく聞きたかったけれども、もう亡くなられてしまったという推薦文を書いておられる。ものすごく生活も感覚も違ったし、対照的でさえあったけれども、吉川先生はやはり奥野先生の知己であったということは確かなことかも知れない。

――ご自分の持っていらっしゃらない別個の卓れた感覚で何かをしっかり掴んでいるという、奥野先生の凄さみたいなものが分かってらした。

だから奥野先生の還暦の時に先生が招待した中国学会のひとは吉川幸次郎先生と早稲田の福井康順先生だけだった。その席だったと思うけど、吉川先生が我々慶應の連中がいるところで、奥野先生という人はあなた方が思っているであろうよりも偉い学者なんだよ、と言ったことを覚えています。というのはそういう意味だったと思います。

――とにかく奥野先生という方は、いろいろな意味で文字通り非凡な方であられた。先生はまた奥野先生とは当然違った面で、やはり大変非凡でいらっしゃるわけです。凡人の標本みたいな私が、今さらこんなことを申すのも何ですが…。

私なんぞは出来損ないですよ。先も見ずに突っかかっていくようなところがあって。

――私なんかはむしろ奥野先生とは付き合いが短いわけでして、大学院に残ってから助手の時代を通して六年かそこらの内に亡くなられてしまわれた。その後はずっと村松先生で、私だってつまり同じようなことが言えるわけですよ。奥野先生からも村松先生からも、何も叩き込まれていないんですから。今日は、つい時間が経つのも忘れてしまいまして、いろいろと興味深いお話をどうも有難うございました。